

チキンライス

2020.3.9

私が小さい頃、小学生の頃までだが、おおよそ月に一度の割合であったろうか。母親に連れられて路線バスに乗り、福島街に行くのが楽しみであった。あの頃の私にとって「マチに行く」とはそういうことであった。

中合デパートや今はなき山田デパートなどを巡り、最後はいつもお決まりのパターンであった。あの頃、福島交通のバスターミナルが県庁前通りエリアにあった。ここがバスの始発だった。したがって、ここから乗れば確実に座ることができるのである。バスに乗る前に必ず行くところがあった。

まずはバスターミナル近くの本屋さんである。ここで私は、母親に「好きな本を1冊選びなさい」と言われ、小学生向けの児童書のコーナーに行き、本選びに没頭したものである。そして家に帰り、買ってもらった本の表紙を眺め、ページをめくるときの幸せな気分といったら、他に例えようのないものだった。この本屋さんの姿は今はない。

本屋さんの次は昼ご飯である。外食である。小学生であったあの頃の私にとってはご馳走である。行くのは決まってバスターミナルの隣の「キッチンカロリー」という洋食屋さんだった。この店は今も健在である。行ってみるとわかるが、今では廃れてしまった県庁前通りエリアの中で、唯一、頑として動こうとしない昔ながらの洋食店である。母親は、決まって「好きなものを食べていいよ」と言ってくれた。

しかしである。メニューを見ると、ステーキをはじめとして高額なものまで並んでいる。ここで子どもは考える。子どもという立場、母親が食べたいもの、我が家の経済状態などなど。私が出した結論は「チキンライス」だった。それほど高いわけではない。実に無難な選択である。それでも子どもにとっては、雰囲気のある洋食店で食べる特別なご馳走だったのである。いつの間にか、キッチンカロリーに行くと、私は決まってチキンライスを頼むようになっていた。母親はいつも「チキンライスでいいの。他のにしたら」と言ってくれるのだが、子どもとしてはそうもいかない。

これは何十年も前の話である。今時の子どもはどうなのであろうか。我が家の娘の場合だが、昔の私のように、メニューを見て考えている。それでいいと思う。私の方は、娘が内心困っていることがわかるので、まず私の注文を発表するようにしている。そうすることで、娘は注文に関して基準を設定することができる。めやすがわかるのである。ここまではいいなとかである。そのうち、娘をキッチンカロリーに連れて行ってチキンライスをご馳走してみようか。いったいどんな反応をするだろうか。

好きな本を買ってもらい、チキンライスを堪能し、バスターミナルに行き、バス座席を確保して座る。座ったときのほっとした安堵感と幸福感は大人になってからは味わえないものである。今でもたまにキッチンカロリーの前を通ると、昔の思い出とともにチキンライスが蘇る。

キッチンカロリーには、大人になってからも何度か行ったことがある。さすがにチキンライスは食べない。雰囲気は昔のままで、かなりレトロな感じである。まるでショウワである。だが、それがいい。この店には変わってほしくない。いつまでも元気でいてほしい。チキンライスとともに。